

## プログラム

### メインテーマ：『教育改革を志向した研究』

- (1) コーディネーター 教学部長 都築 英明
- (2) 演題発表（各14分発表（12分目一予鈴，14分目一本鈴），各4分質疑応答）
- 15：30～15：48  
・大学入学後の学修に対するリアリティショックの研究アンケート結果  
一学修に対する意識について—  
〔看護学部 母性・小児看護学講座〕 教授 山下 八重子
- 15：48～16：06  
・看護教育における授業開発と学習支援システム  
〔看護学部 成人・老年看護学講座〕 教授 寺谷 愉利子
- 16：06～16：24  
・大学生における経済状況と成績の関連性について  
〔保健医療学部 臨床柔道整復学講座〕 講師 神内 伸晃
- 16：24～16：42  
・国家試験対策のための教育支援活動の試み  
〔鍼灸学部 保健・老年鍼灸学講座〕 准教授 水沼 国男
- 16：42～17：00  
・学内向け教学IRデータ配布環境の構築と学習指標としての標準化GPAの検討  
〔医学教育研究センター 医療情報学ユニット〕 客員助教 村瀬 智一
- 17：00～17：18  
・入学時の学力と1年前期GPAの関連性の解析  
〔医学教育研究センター 医療情報学ユニット〕 講師 渡邊 康晴
- 17：18～17：36  
・「人を診る」ための総合的な学習の取り組み  
～附属病院総合リハビリテーションセンターにおける臨床実習を通して～  
〔医学教育研究センター リハビリテーション科学ユニット〕 講師 木村 篤史
- 総合討論（約15分）  
17：36～

# 大学入学後の学修に対するリアリティショックの研究アンケート結果 —学修に対する意識について—

山下 八重子, 松岡 みどり

看護学部

【はじめに】大学生の受講態度が問題視されている。本学においても一年生が90分間静かに能動的に講義を受けられない等の不適応が見られる。これは、入学前のイメージと現実のギャップによる「学修に対するリアリティショック」が原因で学修意欲の減退が起きているのではないかと考えた。【目的】入学前の学業イメージや期待が、入学後変化し学修意識に影響しているか明らかにする。【研究方法】1年生を対象に平成27年12月、入学前後のイメージ変化、生活、勉強などについて、独自に作成したアンケートを実施し分析した。研究は本学倫理審査委員会の承認を得た。【結果】回答数は68であった。入学前とのイメージの違いは82%、生活環境の変化がなかった学生は13%であった。学修では「勉強方法が分らない」「学ぶ分量が多い」「専門教科が難しい」が54%と半数以上であった。職業決定を家族や親戚、教員の勧めが35%、入試区分は80%がAOと推薦入試であった。入学前の不安は「勉強」「友人関係」で80%を占めた。【考察】本学の学生はAOや推薦入試で早期に進学先が決定し、自己学習を身に付けていないまま大学生となったことで、入学後の学修のイメージのギャップが大きいことが、学修意欲へ影響していると考えられる。また、35%の学生は、進路決定が自己の希望でなく家族や親戚、教員の勧めで職業選択していることも、大学の授業内容や看護師の仕事に関する情報収集不足から、予想以上専門教科の難しさを感じ、リアリティショックに繋がっていると推察される。「友人関係」はこの時期には避けられない成長課程の問題でもある。【結論】勉強理解と友人関係で入学前のイメージと現実のギャップが大きかった。入学後、勉強方法に悩む学生がいることが明らかになった。

本研究は平成27年度学内研究助成「教育改革を志向した研究」として行った。

## 看護教育における授業開発と学習支援システム

寺谷 愉利子

看護学部

論者は34年間の病院勤務中に教育学を修得したのち、教育学を基盤に大学で看護教育に携わり10年となった。当大学では、着任した2010年から「Surface Learning 暗記学習」ではない「Deep Learning 意味学習」の「授業開発」に取り組み、教育・実践している。しかし、前向き研究としての授業実践研究は研究倫理審査上難しく、論者はその成果研究を報告する機会がなかった。

昨今、高等教育の質保証や教員のコンピテンシー、「授業開発」を求める時代の波が押し寄せている。当大学でも、「FD (Faculty Development)」「IR (Institutional Research)」が重要視され、論者の授業開発の成果データを使った後ろ向き研究は当大学の倫理審査で許可された。そこで、当大学で取り組んだ「看護教育における授業開発」と「授業開発での学習支援システムの活用」の事例紹介と「授業開発と学習支援システム」の展望について報告する。

## 大学生における経済状況と成績の関連性について

神内 伸晃<sup>1)</sup>, 渡邊 康晴<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 保健医療学部, <sup>2)</sup> 医学教育センター

近年, 日本における世帯所得は減少しており, 大学生においても両親からの「小遣い」, 「仕送り」は, 減少を示す一方, バイトによる収入が増加している. 本学においても学生の経済状況を把握することは重要なことであり, 学生の生活を支援する資料となる. 本調査では, 学生の経済状況を把握するためのアンケート調査を行い, 成績との関連性を検討した.

対象は本学の保健医療学部生とした. 本アンケートでは, 「住まいの形態」, 「仕送り・小遣い」, 「バイト」, 「奨学金」の有無, およびこれらの主な使い道, 「バイトが学業に影響しているか」の質問を設けた. 結果は, 自宅からの通学者が多く, 「仕送り・小遣い」は, 4割の学生が「なし」という回答であった. 「バイト」, 「奨学金」については, 「している」が8割, 「受給している」が6割であった. 仕送りや小遣い, バイト代の使い道の多くは「生活費」や「遊興交際費」であったのに対し, 奨学金では, 「学習費」であった. また, 「バイトが学業に影響しているか」という質問では, 「まったくない」が5割「少し影響している」が4割であった. 成績との関連性について, 多くの学生では成績に影響が出ないことがわかり, 本調査により学生の経済状況を把握することができた.

## 国家試験対策のための教育支援活動の試み

水沼 国男

鍼灸学部 保健・老年鍼灸学講座

### 【背景及び目的】

近年, 学習方法がわからない学生が増加し, 学力低下から留年や退学者が増加した. また, 学力不足から国家試験の合格率は, あまり良くない. 本学の取り組みとして平成25年に教学委員会を設置され, 学修実態・行動把握アンケート, 新入生に基礎学力試験を行い, 学修支援が必要な学生に学修支援を行ってきた.

また, 鍼灸学部の講義の一つに経絡経穴学は, 東洋医学では基礎となる科目であり国家試験では, 160問中13問, それに加え他の科目とも関係が深く, 約3割近い問題が経穴に関する問題が出題されている. 昨年, 経絡経穴学の前年度未修得の学生全員が, 国家試験が不合格であり, いままでの教育支援では十分出なかったことがわかった. 3年生からの対策だけでなく, 1年生からの支援活度が重要になると考える.

そこで経絡経穴学講義成績, 定期試験, 講義アンケート及び入学試験形態, 入学時の基礎学力試験, 国家試験結果等から教育支援活動の必要な学生の抽出し, どのような支援活動ができるか検討する.

### 【対象】

本学, 鍼灸学部学生で過去3年間の経絡経穴学を履修し学生を対象に行う.

### 【方法】

これまで行った①アンケート調査および②入学試験の種別, ③入学時基礎学力試験, ④科目の成績評価, ⑤国家試験の合否, 科目得点等を分析し, 学習意欲低下者や学習無気力者タイプ等の抽出し, 学生の学修支援の方法等を検討する.

### 【結果】

入学時の基礎学力試験の結果の悪かった学生は, 学習支援が必要となりうる学生の確率が高い傾向にあった. それに加え入学試験の種別によって試験形態との関係が認められた.

## 学内向け教学 IR データ配布環境の構築と学習指標としての標準化 GPA の検討

村瀬 智一, 梅田 雅宏

医療情報学ユニット

昨年度の学内研究助成で教育関連データを解析した結果, 大学内の教育 IR の推進には, 教職員の学生成績データアクセスへの効率化が必要不可欠であると体感した. そこで学内ネットワーク上で成績データが共有できるように, 個人固有 ID を付与した後に氏名・学籍番号を除去することで, 匿名化を行う予定である.

また, 今後教学 IR を推進する上で学生の学習指標として, GPA (Grade Point Average) の扱いを検討する必要がある. GPA は各科目の評価(『優』～『不可』)を点数化することで, 学生の成績データを数値化できるため, 大学生の学習評価指標として注目されている. しかし, 科目の評価は担当者によって基準が異なるため, 『優』が多い科目や『優』が少ない科目もあり, 2つの科目でとった『優』を同じ点数として平均した値が学部間で比較できる指標として利用できるのかは定かでない. そこで, 各学年の科目毎の評価から標準化 GPA を計算することで, 通常の GPA に比べてどの程度数値が変化するか調べると共に, 教学 IR の評価指標として利用可能かを検討する.

## 入学時の学力と1年前期 GPA の関連性の解析

渡邊 康晴, 神内 伸晃, 山崎 翼

医学教育研究センター 医療情報学ユニット

1年次で躓くと休退学に繋がりがやすく, この時期の教育指導は重要である. 本学では4月に入学時学力診断テストを行っており, 前期 GPA との比較ができれば個々の学生の成績動向を早期に捉えて教育指導の根拠にできる. しかし, 指標の異なる成績データは容易に比較できない. そこで, 入学時学力と1年前期 GPA の関連性の検討を目的とし, 異なる成績指標データを比較する方法を構築した.

対象は2015年に入学時学力診断テストを受験した145名とした. 前期終了時点の GPA を取得し, 学力診断テストと GPA を偏差値に変換して成績上昇者や成績下降者など5グループに分類した. 学部別にグループ間の人数の偏りを検定した.

学力診断テストと1年前期 GPA の相関は0.52であり, 相関関係が見られた. GPA が平均以下の学生のうち, 成績が大きく上昇したのは19名, 大きく下降したのは27名であった. 学部別では, 成績が上昇した学生は看護学部で有意に多かったのに対し, 鍼灸学部では2極化の傾向を示した.

## 「人を診る」ための総合的な学習の取り組み ～附属病院総合リハビリテーションセンターにおける臨床実習を通して～

木村 篤史

医学教育研究センター リハビリテーション科学  
附属病院総合リハビリテーションセンター

我々教職員の使命は本学の建学精神に則り、本学に入学してきた学生を「真の医療人」に育成することである。「真の医療人」とは様々な病を抱える患者の本質的な問題を東西問わず総合的に捉え、適切に対応することができるような医療者であると考え、そのためには、部分にとらわれず様々な視点から多角的に「人を診る」ことが不可欠であり、そのための教育を行うことが重要である。

附属病院総合リハビリテーションセンターには全学部の学生が訪れ、リハビリテーションに関する臨床実習を行っている。そこでは「全人間的復権」というリハビリテーションの真の理念とその理念を具現化するための総合的に「人を診る」ことの重要性を教授している。総合的に「人を診る」ということは日本の伝統的な東洋医学や看護学の思想においても共通することから、それらの歴史的背景を踏まえながら「人を診る」ことの重要性とその難しさについて教授する取り組みも行っている。

本学の建学精神に鑑み「人を診る」ということの本質を学生に伝えることが、我々教職員に課せられた使命であるものと重く受け止めている。